

困難に満ちた対話の果ての歓びを

「東アジアと同時代日本語文学フォーラム」第2回シンポジウムに参加して

久保田淳一

✉ junichi-kubota@jpfbj.cn

私は国際交流基金という機関のスタッフとして、いまは中国・北京で国際的な学術交流事業を作り出したり、支援したりする仕事をしています。2014年10月、「東アジアと同時代日本語文学フォーラム」の第2回シンポジウムに参加し、充実した時間を過ごさせていただきました。関係者のみなさんに心から感謝したいと思います。

今回、「参加記」を執筆する機会を頂いたのですが、私自身文学を愛好してはいても、研究者ではありませんので、本コラムではシンポジウムでの参加者のご発表や『跨境／日本語文学研究』の掲載論文の内容にほとんど触れることができないことをどうかお許しください。

* * *

2014年初夏、北京師範大学の王志松先生から本シンポジウムについてのご相談のメールを頂きました。その後、王先生から詳しい資料を送っていただき、内部で検討を始めました。資料からは意欲的で明確な問題意識が伺われ、巷によく見られるような一方的な発表に終始するような場ではなく、知的対話が成立する可能性を感じました。ソウルで開催された第1回シンポジウムに参加した国際交流基金の同僚にも意見を求めたところ、「新しい視点から、真剣でレベルの高い議論がなされていました。若手の研究者も多く参加していましたよ」とのコメントがありました。こうして、本シンポジウムを当基金の助成事業として採用することに決定しました。

国慶節(中華人民共和国の建国記念日)を過ぎて、北京の街が長く寒い冬に入ろうとする頃、予定どおりシンポジウムが開催されました。私は10月25日の全日程を、北京師範大学の教室で過ごしました。

実際に会場に足を運んでみて、このシンポジウムへの助成を決めたことは間違っていなかったと思いました。いくつもの興味深い発表がなされ、いくつもの交流が生まれていました。時間的な制限があるなか、視野が広く、鋭い着眼点を持った、巧みなプレゼンテーションに接することができて、個人的にもおおいに啓発されました。休憩時間などには参加者のみ

さんと楽しくお話をさせていただきました。日本語文学や比較文学の研究者のネットワークの在り様をまざまざと目撃することができました。

当日感じた個人的な希望を正直に書かせていただければ、1つひとつのご発表や論文がより高次の学問的文脈の中でどこに位置づけられるのか分かるようなセッション(基調講演、対談等々)を聴くことができたらもっといいのに、と思いました。私は仕事柄、様々な分野の学術シンポジウムに参加するのですが、シンポジウムが置かれている文脈や個別のご発表の位置付けが分かると、門外漢の私もいっそう関心をもって聴くことができます。そこには一種のアウトリーチ的な意義もあると思います。とはいいつつも、実際には、シンポジウム終了後に『跨境』創刊号の西成彦先生の文章を拝読し、本フォーラムが持つ射程や文脈についての疑問は氷解しましたので、全く問題なかったのですが。

* * *

当日、会場で『跨境』創刊号を頂きました。韓国での第1回シンポジウムの成果を取めた、思わずページをめくりたくなる色使いが印象的な1冊でした。そして、本フォーラムの設立趣旨が記された「創刊の言葉」を読みながら、私は以前自分が担当した演劇作品のことを思い出していました。

おそらく、第1回のシンポジウムや『跨境』創刊に向けての準備が進んでいた時期とそうずれてはいないのではないかと想像するのですが、国際交流基金では2012年から2年以上にわたって大型のプロジェクトが進行していました。そのプロジェクトは「祝／言」という演劇作品を日中韓のスタッフ・俳優が共同制作する事業(青森県立美術館との共催)でした。この作品の作・演出を担当した長谷川孝治さんの文章と響きあうような問題意識が「創刊の言葉」から読み取れるように、私には感じられました。この演劇作品のために長谷川さんが書かれた「風・水・光そして空」という文章から引用してみたいと思います。

おそらく、とても古い時代から風は地表を吹き抜けていたのだろう。空は世界を繋いで、海も世界を繋いでいたはずだ。／近代国家の成立がウェストファリア条約以降のことだったとしても、風と空と海にとってはささいなことだ。

(…中略…)

中国人と韓国人と日本人と呼ばれている人たち。光と水と風には、中国のとか韓国のとか日本のという言い方はそぐわない。／それは単純に「光」「水」「風」と呼ぶべきものだ。そして、それらは「空」を介して繋がっている。／そこには境目などはない。／国境線の線が見えないように。

如何でしょうか? 「創刊の言葉」と同じように、時間的にも空間的にも広い視野が感じられる、開放感のある文章ではないでしょうか。

このプロジェクトに参加した日本・中国・韓国の俳優、舞踊家、音楽家は、2011年3月に日

本の東北地方を襲った大震災と津波を劇場の舞台の上でともに経験します。劇中の主人公は韓国人の新婦と日本人の新郎、そして2人の共通の友人である中国人の女性。祝言(結婚式)のために家族や親戚、同僚や友人が集まった当日に地震と津波が式場を襲います。私の目には、彼らは、本フォーラムのメンバーと同じように、「跨ぐ跨ごうとする」人々であるように見えます。「それぞれの局地性や立場を無視することなく、そこに一つの足場を置きつつも、さまざまなく境の向こうに他方の足をのばす」人々でした。もちろん彼らは役柄を演じているわけですが、作品を作り上げるまでの過程はまさに「跨ぐ」作業の連続だったと思います。幸いなことに彼らは、困難に満ちた対話の連続の果てに、歓びを分かち合うことができました。

* * *

『跨境/日本語文学研究』第2号の発行をお慶び申し上げます。同時に、今年(2015年)の台湾・輔仁大学でのシンポジウムが成功裏に開催されますよう心からお祈りしています。そして、このフォーラムの一連の取り組みの果てに、関係者のみなさんがたくさんの歓びを分かち合うことができますよう切に願っています。

(終わり)

久保田淳一 Junichi KUBOTA

国際交流基金北京日本文化センター。副所長。2007年、東京外国語大学外国語学部中国語専攻卒業後(在学中に交換留学生として国立台湾大学に1年間滞在)、独立行政法人国際交流基金に入社。日本語事業部勤務の後、2009年4月より外務省広報文化交渉部文化交流課に出向。国際交流基金復帰後2011年9月より北京駐在を開始し、2013年11月より現職。